氷柱

水野仙子

私は毎日のやうに五番さんへ遊びに行つた。そこには、此處に來てからもう一月程になるといふ、福島の相場師夫婦が逗留して居るのであつた。夫婦とはいつても、お雪さんといふその妻女は、妾同様な後妻なのださうである。去年の春までは、この宿の川一つ向ふに軒を並べた遊郭、そこは若葉町といふその里に、紫といつて勤めの身であつたことも、廊下で顔を合せて、お互に目送して居た頃から、女中に聞いて知つて居た。眼は少しく斜視であつた。背は少さかつた。けれども、髪をいつも櫛巻きにして、その毛がまた黒く濃く、越後生れと聞いて頷かれる。その色の白さに、半纏の襟の黒い艶が、どこか垢抜けがして見えるのであつた。宿のならはしで、何番さんとさへいへば事足りるので

私達はつい其五番の主人の姓名も知らないで過した。日の午后になれば、定つて梯子段の仲程から、『五番さん福島から電話でございますよ。』といふ女中の大きな聲が聞えた。すると、續いて急ぎ足の草履の音が、とん〳〵と電話室の方へ降りて行くのであつた。あれは相場の變動を本店から知らせて來るのだと、番頭が或日私達に教へて呉れた。

湯壺で顔を合せるのが度重なるにつれ、お互に人懷しさの折からとて、言葉の解けるに造作もなく五番と十番と部屋並びなのも、思ひ設けずに出入りするのに都合がよかつた。

『こちら様にばかりですよ、お雪さんがあゝしてちょい〳〵話しに來られるのは。今まではつひぞ一度、よそ様の部屋にお茶一つ飲みに行つたことはありませんもの。旦那がやかましひんでね。』と、女中頭のおばあさんが炭かけをそつと前掛けにしのばせて來て、

『これは帳場を通さないんですから……』と、お茶飲みに來た話の序にこんな事を言つた。かうして女中達や番頭に、お茶菓子のお相伴をさせて、それ〴〵な話を聞くのも、また私達が無聊を慰めるのゝ一つであつた。それが別段堪らなく面白いと云ふのでは決してないけれども、たゞもて扱ひ兼ねるやうな心の遣り場には、僅かばかりの變化となる嬉しさであつた。家族合せも三人以上の人が要れば、洋燈をつけに來る番頭に、夕飯がすんでからの約束も、三度に一度は外れるものと思はねばならず、東京のお客様に、聞かせられるやうなのではないけれどゝいふ前置きで、急き込んだ節廻しの太閤記十段目を、得意氣に語つて聞かせた三階の客も、翌くる日はもう主婦や番頭に送られる人であつた。裏二階の係りの女中が迎へに來て、一晩を家族合せで馴染んだ川俣の羽二重商人、それも次の日

は、首に卷いて居は絹ハンケチを、女中にせがまれたまゝに殘して發つて行つた。或は桑折町の機織業、或は東京から地方廻りの若手代など、來客を報ずるベルの音が響くに連れ、廊下を急ぐ婢の足音の高いのも何となく嬉しく、どんな人、何の客、一晩泊りか、逗留客かと、きまつてかう女中なり番頭なりに問い糺すのであつた。

冬二月――北國の空は日に折々に雪催ひして、降りこめられたまゝに思はぬ逗留を強いらるゝ人も夜となれば川を十綱の橋に越えて、若葉町の三味の音に隱れるが多く、晝前顏を見せなかつた番頭が昨夜は何番のお客様のお案内でと、あとは笑つて煙管を抜くこともあつた。時には縣廳の役人とやら離れに招び集めた土地藝者や半玉に圍まれて、訛りのある端唄を、喧しい女達の聲に交じへてゐることもあつたが、醉ひつぶれても土曜を日曜にかけた二日、三日目には又もとの靜かな冬の宿となるのであつた。入り代り、行きはいり、それは可なり繁くても、湯治目あての逗留客は春から夏にかけての定まり故、靜かでいゝと言はゞ言へ、見るものにも、聞くものにも、さしたる變化がなければ、日に〳〵襲つて、累なつて來る退屈さをば、どうすることも出來なかつた。

一日二日と指を折つて見れば、辛じて開いたゞけにとゞまつて、旅程の日數はまだその半ばにも行かないのであつた。飽いて直ぐに他の地に遷られる氣紛れな旅とも違つて、伯母と母からくれ〴〵も言ひ含められた通り、私は從姉の、あの眼の色の和むまで、この地に滯在せねばならないのであつた時には泰西の女優の寫眞に見るやうなその眸が、燃えたつに氣付いて、なんとは知れずはら〳〵と胸をときめかし、或時は欄干に寄つて流れに落す目の色の、悲しさに沈むのを見て取つて、それとなく

はしゃいだ身振りに言ひ寄れば、貴女には未だなんにも解りませぬ、あなたなぞにこの悲しさ、この遣る瀬なさは解りませぬと云ふやうな目付きをして、寧ろ愍れむやうに、從姉は私を見かへるのであつた。女といふ同じ世界に棲みながら、僅かに年の三つ違ひに、私のまだ知らぬ、まだ見ぬところがあるのであらうか？　と、私は不審しくも、稍々腹たゞしくも、かう見へて少しく悄氣るのであつた怪んで問はれたなら、扁桃腺腫手術の跡と答へるやうに、從兄から教しへられた通り、かう傍から人に説明するのに躊躇しなかつた私は、從姉が頸動脈に觸れようとした刃の冷たさも、さうなるまでの道筋も、解つたやうで、考へれば考へる程解らなくなるのであつた。初めから別れねばならぬ運命をもつて結び合つた二人が、その悲しい終極を、死によつて救はれようとして妨げられ、阻まれた痛恨の情を、汲みやらうとしても及ばぬ怨みは、時として私にものを思はせるのであつた。かうして私は出来得るだけ細心に、痩せ衰へた從姉の肉の整ふに注意しながらも、我が發育を培ふ鮮かな血の活動に、何も彼も忘れて快活になつては、爲すことのない退屈さを、紛ぎらはすものをと日々に漁つて歩いた。

五番さんへは、いつもお雪さん一人の時を見込んで行つた。今日もお雪さんは、此種の女にしてはつゝましやかな取り做しで、お茶うけにと土地風に、煮豆などを手の平に掬つて呉れた。話とては別段なかつた。着物の話――お雪さんのやうな女の身に取つては、着物といふものが、その命でもあり財産でもある通り、最も興味を持つて迎へたその着物の話にも、趣味を持ち得る程、私はまだ我體の色彩に目覺めては居なかつた。

『……私は顔剃りが大嫌ひなんですよ、あのぬら〳〵した刷毛で撫でられるのが氣持ちがわるくつて……』と、お雪さんはさも厭そうに切り上つた頤のあたりを撫でゝ顔を顰めた。話はいつかこんなことになつて居た。私はやつぱり堪らなくつまらなくなつた。

紅緒のゆるんだ上草履をつつかけて、ぱたり〳〵と張り合ひなささうに部屋に歸つて見ると、芳江さんは――從姉の名――專念に何か書き物の筆を動かして居た。ふと振り向いた顔に輕るい興奮の色が見えて、穂を嚙んで筆の墨跡が、唇にぽつちり殘つて居るのを美しと見ながら、邪魔をしてはと私はそつと障子を閉めた。

そのまゝ廊下傳ひに、突き當りの梯子段をのぼると、私はこの宿の入口に立つて、硝子戸越して表の往來を眺めて居た。そこは川岸に向つた勝手元からすれば、四階になつて居るのであつたが、見つけは往來に添つて、平屋造りのやうに極低く見えた。炭をつけた駄馬が、とぼ〳〵と曳かれて行く後から、いづくの宿につける車やら、土地には見馴れぬ夫婦連れの客が、勢ひよく馳け拔けて通つた。私は何となく心殘りを覺えながら、若しや此宿にと思つたばかりに、轟きかけた胸の微かな音を、心寂しく味はつて居た。こんな時に疲れた足を此宿の前にとめて、一夜の宿りを乞ふべく、柱に備へつけた呼鈴の釦を押す人があつたならば、私はわが待人でも來た如く、馳け出て壞しげにその顏に見入つたかも知ぬ――照らぬ日は暮るをも急ぐやうに、薄ら寒きが湯ざめの身に覺えられるやうになつた

早く夜が來、面白い夜が來と打つやうに、夕暮れかけて人の心をそゝる若葉町の撥音が、今日も亦三味の音に交つて川づらを越えて來た。もの哀れにも聞かれる其音にひき寄せられるやう、人氣のな

い部屋〳〵の冷たい空氣を分けて、流れを見下す欄干に佇んで見ると、何處からか掃き込まれた雪が水を含むでうらうらと浮いて居る。その斑の、流れるともなく流れて行くのに送つて居た眸をあげて、連山の雪のやゝ眩しいあたりを望めば、安達太郎山とも見はれる山の中復に、炭燒くそれが、一筋の細い煙りが立ちのぼつて居た。

裾短かに着た踵に、冷たい風が觸れるのを覺えると、私は度々芳江さんから、『お鶴さん、あなたもつと着物を長めにお着なさいな』と注意されたことを思ひ起した。姿を整へる手心を知つた女は、却つて人の前に細帶姿を恥ぢぬ傾きがあつた。それも私には常から不思議の一つなのであつた。私のまだ見ぬ世界よ、そこには何が私を教しへやうとして待つて居るのであらう？

絃歌の音に夕暮れは迫つて、若葉町にはもう灯が入つた。私は芳江さんが、『お鶴さん、お鶴さん』と尋ねて呼んで居るやうな氣がしたので、急いで四階を降りて三階の部屋に歸つて來た。火鉢の前にはもう、二つの赤い塗膳が私を待つて居た。私は夜が來て嬉しさに、何も彼も忘れてしまつた。

＊　＊　＊　＊　＊

ふと目をあひて見ると——番頭が洋燈を下げて來たことも、女中が火をいけに來たことも、すべての物音がとうから耳にはいつては居たが、急にぱつとするやうな明るさに驚いて、芳江さんの方はと見ると、いつ抜け出たか、括り枕に頭の形を殘したまゝ、夜衣の兩袖ははねられてあつた。私は衣桁にかけた手拭ひの、見覺えの一本がないのを見て取ると、輕るい不平をおぼえながら、手早く寢卷の前を捲き合せて、幾階もの階段をとん〳〵と湯壺へと降りて行つた。

『ひどい人！　出しぬひいて。』と、私はいきなり硝子戸を排して淡い湯氣の中に顔を出すと、
『御免なさい、だつてお鶴さん、あなたよく寢入つてらつしゃるんですもの。』と、芳江さんは笑つて上氣した顔をこちらに向けた。外には誰も居なかつた。ざぶりと縁も溢るゝばかりに湛へた湯の中に上り込むと、ゆら〳〵と搖れて、さァと花崗石の流し場を走つてあまり湯が流れる。
『あ、惜しい！』と思はず言ふと、『厭な人！』と芳江さんは私の肩を輕るく打つた。
『随分肥つてるのね、ほんとに羨しいわ。』
『だつて、あなただつて随分肥つてたぢゃありませんか、それあの寫眞の時分は、ねあの袴を履いて丁度看護婦が和服を着たやうなあの寫眞の頃はよ。』
『ま、口の惡るい！　看護婦が着物を着たやうだつて……だけども全くね、あの時分は私も可なり肥つてたわ。』
『苦勞したからそんなに瘠せたんでせう。』と、私は笑戯とも眞面目ともつかず口輕るに言つた。
『苦勞つて言つて了ふと、なんだかあまり平凡に單純になつてしまふけれど……さうね。』
と言つて芳江さんは言葉を切つた。
『だけども亦、なんといふものを思はせる言葉でせう……。』
　私は少しく怖くなつて來た。それは芳江さんが、さま〴〵な其思ひ出から感傷的になつて來るのを怖れたので、不知の世界が、私の判斷の前に、朦朧として現はれるのが、怖はいからなのである。私はつるりとお湯からあがつて、花崗石の上に我が肌を置いた。いつか私の掌は、肉付き豊かなわが

腕のあたりを、我が股のあたりを、思ふことなげに、はたまた其見事さを愛でるかのやうに、ひた／＼と叩き試みて居るのであつた。打たれるたびに微かに掻ぐ肉の顫動は、いたづらに肥り行くを託つものゝやうに見えた。

私はふと、

『まるで膃肭獣のやうね。』と突然かう言つて首をあげた。

『え？　何が？』と芳江さんは、血の色の鮮かになつた身をあげて私の脇に並んで。その垂る程にならぬ乳房は妊らぬしるしとなるけれども、私とは何處か違はねばならぬ筈のその人が、處女とかはらぬ肌を持つて居るといふことは――肌の曲線に何の異常も現はれてないといふことは、いつも私に一種の妬ましさと不安とを感ぜしめるのであつた。けれども私は瞬く間にその感じを遣り過して、

『私達がよ、なんだかそんな感じがするぢやありませんか！かうして温まつてはのこ／＼とふちにあがつちやア、またどぶり！。』

私は無性に笑ひ出したくなつた。鰭のやうな四脚を岩に乗せて、丸い頭を擡げるやうにしたあの膃肭獣！

『お鶴さんてば、碌なこと言やしないのね！』と、芳江さんもとう／＼堪らなさうに笑ひ出した。此時丁度男湯の方に、とん／＼と梯子を下りる足音が聞えたので、私達はものに襲はれでもしたやうに慌てゝ湯壺の中に潜り入つた。

湯花の匂ふ暗い梯子をのぼると、そこに展けた板の間には、テーブルを置いていつも松の盆栽が載

つて居た。名所の繪端書や土地藝者の寫眞などを、額にして掛け並べた中に、湯上りの姿をうつす姿見が、歩き寄れば寄るだけ近く正面に立つて居るのであつた。私達はこゝをさしてバルコニーと言つて居た。せめてはさうした名にでも、懐しい美しの都を偲ばうとする心からなので、二脚の椅子を窓の許にひき寄せ、斑に雪の消え殘つて川岸の町を眺めながら、耳新しく聞かれる川の水音に和すやうに、私はいつもこゝで、芳江さんから讃美歌を敎はつて唱ふのであつた。

男湯の方から誰やら上つて來る足音がした。と思つて振り向く鼻に、宿の寢卷に浴衣を重ねた上半身が、ぎょろりとした目と共に現はれて、その目が私達の上に好奇らしく注がれたと思ふ間に、少しばかり道をせばめた椅子の後を、會釋するやうにして擦り抜けて通つた。私達は顔を見合せた。確かに昨日までは見なかつた顔なので、新來の客に耳聰い私達がまだ知らなかつたとすれば、昨夜更けてから遲く、あのベルの釦を押したのかも知れぬ――私達は何となく勇んだやうな心持ちになつて、部屋の掃除のすんだ頃を見計つて椅子を立つた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

その日の午後であつた。紅茶などをいれて、火鉢の前に爲すこともなくぼんやりしてゐると、通り過ぎると思つた草履の音が、はたと部屋の前にとまつて、

『御免下さい。』と聞き馴れぬ聲がする。

『はい。』と審しげに二人同時にした返事と共に障子が開いて、

『お邪魔いたしてもよろしうございますか？』と搔卷姿の男が腰をひくめて挨拶をした。それは今朝ほ

どバルコニーで會つたあの男であつた。

『さ、どうぞ、取り散らしてますけども。』と、座蒲團を直すと、

『ぢゃ一寸お邪魔いたします。どうも退屈をして居りますんで。』と煙草入れを握つたまゝ、腰低くづつとはいつて來た。私達は女中なり番頭なりからの言傳もなく、又此方からの挨拶もないうちに、かうして馴々しく男に訪はれたのは初めてゞあるので、少しく薄氣味惡るく思はれないでもなかつた。年は決して若くはなかつた。四十ばかりと思はれる位なのに、役者のやうにぎよろりと動く目と、眞額の窪みとが、淺黒い顏の何處かに、疵跟でもありさうなと思はれる程苦味走つて居た。その顏がなんとなく私達に用心させるのであつた。けれども先方は、人を呑んだやうな調子の中に、隨分鍛錬を經たらしい腰の低くさを見せて、こんな場合に白けがちの座を、見事に繕つて行くのであつた。

『御婦人方おふたりだけのところに、失禮とは存じましたが、つひ退屈なものでござんすから。なんでござんす、その先刻ほど、あれはお靜さんとか言ひましたか、あの肥つた女中さんが、こちらさんでも退屈なすつてらつしゃるから、話しに行つちゃどうかつて言ひますんで、へえ全くこんな時には御遠慮申しますよりはね、え、なんでござんす、手前は昨晩遲くこゝに着きましたんで、六番に居ります、へえ、つひこの並びの。』

私達は久し振りで懷しい都の言葉を聞いた。しかもそれは、私達のやうに、産湯を里の清水に浴びた者には、眞似ようとしても眞似られぬ、滑かな響を持つて居た。

『貴女方でござんせう、今朝ほどお湯にはいつてらしたのは。お話しの模様で、どうも此邊の方ぢや

ないとすぐに思ひました。で矢張り東京の方から……？　成程、へえ、左様ですか、手前も、えゝ東京は淺草、へえ淺草生れの者でござんす。』

巧みな手付きで刻みをつめる煙管も、態(わざ)との好みか鉈豆形(なたまめがた)なのも珍らしかつた。茶を汲んで出す、菓子をすゝめる、用心はしながらも、知らず〳〵のうちに心も解けて、殊にはお互の好奇心から、聞いたり聞かれたりして話し興じた、話せば話すほど、此人は私達に取つて興味の深い人であつた。語れば語るほど、その言葉の源が豊かになつて行くやうに見えた。私達の頰には輕るい興奮に血がのぼつて、無暗に起した火氣(ひけ)と鐵瓶の湯氣とに、涙が溢れるほど目のうちが熱くなつて居た。

『へえ、こりやア惡るいもんぢや……失禮ですが……ありませんね。』と、やがて煙管を嚙(くは)へたまゝ、茶ぶだいの上に手を延ばして、芳江さんが書きかけた日記の脇の硯を手に取つて見て居るので、

『さすがは御商買ですね。』と私は笑つた。文房具の旅商人なのださうである。

『一體どんなものをお持ちなんですの？』と云ふと、

『文房具でござんさあ。』と少しは笑戯氣味にして、

『ま、今度は万年筆を重にしてやつて來ました。』

『へえ、この邊で万年筆なんかそんなに賣れますか！』と芳江さんは不思議さうに言葉を挿んだ。

『へえ、手前の持つてます万年筆は一本二十錢……』とぽくりとお辭儀をして、『上等泊來堅牢無比三年は請合ひますんで。』とすまして手の平(ひら)で煙管を叩く。

『それを卸(おろ)して歩くんでせう、私、叔母さんの店でよくそんな人を見たわ、吹聽が旨(うま)いから欺(だま)され易

いけれど、駄目なものですつてね！』と私が笑ひ〳〵云ふと、
『御笑戯もんで……私はまさかペテン師ぢやありませんや。これでも昔は……』と言ひかけて、ぎろりと其目をさせたが、急に口のあたりを引き締めて幽かに笑つた。
『昔は……？どうなすつたの？』と芳江さんが疊みかけると、
『ま、止しませう。』と煙草をつめる。
『お話しなすつたつてもいゝぢやありませんか！ 』
『あまり名譽な話ぢやありませんもの、えゝ、もとは私の親父の代までは、可なり……えまあ一寸聞えた文房具屋でした。私がさんざ遊んだ揚句は、すつかり株を丸善に取られてしまひました……後のところはま、お察しに委せまして。』
　私達はさてこそというやうな顔をした。けれどもまた、話に乘せられて居るやうな、危ぶかしい氣もされないではなかつた。根掘り葉掘り、それは私が、少しでもわが未知の境を開拓して行かうとする慾望にそゝられて、その身の上話などもせがんで聞いた。
『……たとへどんな大きな商人でも、小學が卒へると、きつと手堅い商人の家に丁稚にやられたもんです。それあ、あの邊のつまり商人氣質でさあ、私もとう〳〵中學を三年で止させられて、奉公に遣られました。厭だのなんのつたつて仕方がありませんや、これでも一粒種の、大事なボツチでしたからね、大臣になりたいの、なんのかのと、生意氣なことばかり言はせて置かけりやしませんわ、私の預けられたのは質屋でした。そこに娘がありました……。』

夏は中庭の青葉に、苔蒸した石燈籠も古めかしく、泉水を泳ぐ背黒の金魚が、靜かに浮いてついとまた隱れる藻の搖ぎに、折から風鈴のチリ〳〵と鳴るも靜かな眞晝、弟のわるさを窘める優しい聲がふと奥から洩れるのに耳を聳てゝ、怪しく胸の動悸の高まるのを覺えた罪のなさ、或は、から〳〵と格子戸の開く音の繁くなる宵、古顔の老婆が、頼まれ使ひの手硬ひ掛合ひ振りを、暖簾のかげからそつと覗く白い顔に、ちらと行き當つた目と目のたびに、小袖を疊む手の顫へたその思ひ出。

『……何しろ若こござんしたからな。ひつくるめて言ひや主人の娘に思ひをかけたんです。今の言葉で言ひやラヴしたんです。私は二十の時に暇を貰つて家に歸りましたが、歸つてからも、さうして絶えずぶら〳〵してたもんですから、親爺がとう〳〵そんなことならばつて云ふんで、立派に貰つて呉れました。主人の方でも心よく承知してくれましたさ、兎に角、親爺はその頃盛んにやつてましたからな。……私とは二つ違ひでしたから、十八の可愛い嫁さんでした。』

私は話に耳を傾けながら、默つて立つて柱の釦を押して、また默つて座に直つた。鐵瓶の湯が、先刻から絶え入るばかりにたぎつて居るのであつた。

『お呼びでございますか？』と、やがて婢が顔を出すと、私はまた默つて九谷の水さしを取つて渡した。

『そこです。私のしくじりの因は……』

句を切つて手早く吸殼を吹き落し、がらりと煙管を投げ捨てたかと思ふと、少しく反りかへるやうにして、また、

『そこです。』と目の色が鋭くなつた。
婢(をんな)は再びはいつて來て、水さしの水を鐵瓶にさしながら、
『大へんお話がもてますねえ。』と心なく言葉を挿(はさ)んだので、三人は今更のやうに顔を合せて微(かす)かに笑つた。
『お靜……』私達に向いて『これは私の家内ですからどうぞ宜しく、ふゝゝ』と咄嗟の間に肥つたをんなの手を取ると、
『さあ、お駄賃をあげよう。』と、先程お茶うけにと挾(はさ)んだのを、飲める證據(しやうこ)に口もつけず、そつと新聞紙の上に置いた蒸菓子を、その手の平に乘せた。
『おや、これはどうも御馳走様。私の旦那様は大へん親切な旦那様で……』
笑ひ〳〵婢が出て行くのを、
『ふゝ、あの女あれでなか〳〵隅に置けませんや。』
『それから如何(どう)なすつたんですの？』と、私は待遠しさに先を促した。
『さ、その何でしたね、私は自分ばかり一生懸命になつて、ちつとも女の心持ちなんてことを考へなかつた。思ひ焦(こが)れた揚句、やつと思ひが叶つてやれ嬉しやと思ふ……まあ誰れでも初めは夢のやうなもんでさあ。ところがどうです。』と聲を低めたかと思ふと、
『女にはもう、ちやあんと男がありましたわ！』
葉を喰ひし虫は知らぬか蓼(たで)の花、私は芳江さんと顔を見合してたゞ息を引いた。

『そこです。ね、そこです。女つてものはあてにならないつてのは……あ、障(さわ)つたらごめんなさい貴女方は、ま別として置いてさ、女つてものはあてにならない。私はつく〴〵世の中が厭になりましたね、いや全くでさあ、折角自分のものとしてみれば、とうの昔に人のものなんだ……それは同じ家(うち)に居た番頭でしたがね、そいつと關係があつたらしいんです。さあ私は、隨分煩悶しましたさ、それからつてものあ、ちつとも家に寄りつかない……遊んで遊んで遊びぬいて、どうにでもまれつていふやうな氣になつちまひましたわ。親爺がひとりで心配して、綺麗に片づけては呉れましたが、よく云ふことぢやありませんか、一度受けた傷は癒へるもんぢやないつて……全くでさあ。』

創(きず)吹く風の冷(ひえ)たを、再び新しくしまい爲めには、寧ろ聞くまいとしてもゝう、語らなければならぬ要求に迫られてるやうに、言葉を續けるその調子のうちには、いつか初めの程のやうな、改まつた口調が拔け去つて居た。

『親爺が死ぬ、おふくろが死ぬ……人の家の落ち目になるつてものあ不思議なものですよ、惡るいことには惡るいことゝ累(かさな)つて來るものです。だが今だから懺悔しますと、私は結局(けつく)それが氣樂のやうに思ひましてね、その時なんでさあ、親戚の者の云ふ通りになつて、後妻でも貰つて、手堅くやり出しあ、どうにか追つつきましたんでさ。けど何しろ自棄(やけ)に目が眩(くら)んでましたからな。かうなつちやどうも旗揚げも、えゝ、そりや考へないこともありませんや、考へないこともありませんや、けどもう駄目でさあ……私は今だにまだ獨(ひと)り身です、えゝそれ以來ずつと……女にあ……細君には懲(こ)り〴〵です。けどその代りにあ、どこに行つたつて美しい女が自分のものでさあ。』

廊下のあたりが少しばかり騒がしくなつたと思ふと、女中がもう夕餉の膳を運んで來た。
『もう？』と言うつたやうな目にそれを迎へると、私は直ぐに殘り惜しさが胸にこみあげて來た。
袖屏風に洩れる雪洞の灯が、ほと〳〵と瞬く怖れに、こまむすびの帶の搖ぎも後めたく、倉の戸前に立ちわづらふお染に、前髪の久松が美しい顏も見ぬ間に幕が下りたやうな……その殘り惜しさはけれど如何することも出來なかつた。
『もうこんな時ですか？』と六番の人も驚いたやうにあたりを見廻した。手早く煙管を筒に入れると『や、どうもとんだお邪魔をいたしました。おかげさまで面白く……いえ、どういたしまして手前こそ近頃にない面白いお話を伺ひました。ぢやさよなら。』
灯が入るまでにはまだ間もあるのに。
『それではまたどうぞ今晩にでも。』と、私達は思ひ切りわるく送り出した。そして魅せられた魂が皈つたやうに、顏を見合せてほうつと深い溜息をついた。

＊　＊　＊　＊　＊

なんとなく張り合ひがあるやうに起き出て見ると、外面はうつすらとした雪景色だつた。ふと私は芝居がへりの昨宵が思ひ出された。初日とはいひながら、小道具などの揃はないばかりでなく、湯治がてらの旅役者達が落ち合つて、一興行といつたやうな間に合はせが、齒痒いやら冷汗が出るやらで大切りまで我慢が出來ず、不景氣な木戸の燈りを潛つて出ると、思ひもかけずはら〳〵と雪が飛んで居るのであつた。迎への傘には途中であつて、六番さんが小聲の小唄に、わざと若葉町の灯の中を通

りぬけて歸つたのであつた。

朝湯につかつて來ると心地よく頭がはつきりとなつた。欄干に手拭ひかけに出たまゝ佇(たゝず)んで、向ふ岸の引地屋の前に、小犬が二匹戯れ合つて居るのを眺めて居ると、そこに水を飲むとて一足後(おく)れた芳江さんがはいつて來た。

『お鶴さんあのね、今そこで六番さんに會つてよ、鞄を持つて出て行つたわ、商ひに行つたのでせう。』といつた。

私達は常の通り朝餉の膳に向つた。さうして、今日一日をどうしようといふやうな、いつもの氣分にも捕はれずに、新しい題目となつた六番さんに就いて語り合つた。曾て讀んだ小説中の人物を、誰彼に當て嵌めるのが好きな芳江さんは、『たけくらべ』の中の正太が大きくなつたやうな人だと言つた私達はたゞ何となく嬉しかつた。

朝のうちの靜かさがいつか風に變つた。ところ〳〵に閉(とざ)した雨戸に、こと〳〵と風が鳴つた、時折さら〳〵と庇(ひさし)や地上の雪を捲きあげる音がして居る。寒さも際だつて感じられるやうになつたので、をばさんが慥(こさ)へて呉れた置炬燵の中にはいつて、私はいつからか讀むやうにすゝめられて居た『その前夜』を引き寄せた。

うと〳〵となりかけたと思ふ時に、

『や、昨晩は失禮。』と言つて六番さんがはいつて來た。今日はもう、私共のをぢさんでゞもあるかのやうに、

『やゝ、こりやいゝものがある。』といきなり炬燵に割り込んではいつた。
『どうなすつたの？　御商賣は？』と云ふと、
『駄目々々、一廻りして來たが駄目でした。やつぱり遊んだ方がいゝ。』と言ひながら、床の間の掛軸の達摩に目をとめると、
『達摩さんこちむかしやんせ世の中は雪月花に酒と三味線。さうおつかない眼玉をして睨んでるものぢやござんせん。時にどうでした昨晩の何は……めつかちの十郎やお襁褓盥のやうな顔をした五郎は、なか〳〵東京ぢや見られませんな。やつ』と掛け聲をして煙管をひたりと額に當て、
『と、めつかち十郎の屁つぴり腰は恐れ入つちやつた。あれはね、あの十郎になつた男は、あれでも自分の缺點を知つて居る。併しそれが名人でない爲めに却つて滑稽になつちやつたんでさ。えゝそりや確かですとも、自分は皆が高過ぎるつてことを絶えず頭の中に置いてるもんだから、立ち廻りの時なんぞに、自づとその心持ちが出て來て、あんな屁つぴり腰になつちまふんでさ。そこを旨くやるのが名人なんです。』と。身振り手振りに煙管を振り廻して居たが、一頻りすぱ〳〵とやつて見て、脂のぢり〳〵するのに氣がつくと、
『お鶴さん、すみませんが私に紙を一枚下さいな。』
　私は何氣なく信玄袋から櫻紙を取り出して渡した。するとちらりとそれに目をとめて、
『こんな上等でなくとも、淺草紙でもなんでも貴女の使つてる鼻紙でよござんす。』と云ふ。
『だからこれが鼻紙よ。』

『嘘でせう？　貴女はこんな紙使はない筈だ。』
『どうして？』
『ね、この紙を使へるやうになつたら話せるんですよ。』
『どうして？』
　私はかう重ねて聞くより外はなかつた。怪訝な顔をして、芳江さんの顔はと見ると、芳江さんは私の讀みかけの『その前夜』を手繰り寄せて、默つてバラ〳〵と頁を繰つて居る。
『お聞きなさいよ。こゝんとこ私は好きなのよ。ようござんすか！』とさうして突然聲をあげて讀み出した。
『エレナは顔を蔽ふて『あなたはどうしても妾にあの、貴郎を愛してゐると云はせたいんだねえ。』と低聲になつて、『あゝもう妾云ひ出してしまつたわ』『エレナさん』とインサロフは呼んだ。少女は男のさし出す手を握りしめて、その顔を見上げたまゝその胸に身を投げかけた。物も云はず抱きしめる腕に情をこめて、インサロフは犇とエレナの胸を抱いた。改めて貴女を愛して居ると名のるまでもない。唯一聲叫んだその聲、見る間にかはつたその樣子、身も心も打任せて取り縋つたその腕の高波、髪の毛を弄るやさしい指ざはり、すべてエレナには男の語る戀の詞と聞かれたのである。男は何も云はぬ。女も何も聞かうともせぬ。『その人は茲にゐる、その人は私を愛してゐる・・・・この外に何の望む所があらう』今や身の願ひは足りた。外に何の求むる所があらう、『あゝわたしもう、嬉しくつて』と咽きが自づと唇を洩れたが、それともこの胸は果して男の胸か、はた吾が胸か、いかなれ

ばしかく心地よく波打つて、やがては吾胸(わがむね)にとけ入らうとはするぞ？……男は默然として身動きもせず……』

『あゝ』っと突然六番さんが聲をたてた。

『あゝつまらない、あゝつまらない。』

『どうして？』と私は息をつめて言つた。調子の張つたその聲に目をつぶつて聞いて居ると、芳江さんの感情がやがては中のエレナに解け込んで、自分が讀み得たそれよりも、一層の面目(おもしろ)さが感じられたからであつた。

『人のことだもの！　自分のことなら嬉しくも面白くもあるけれど、あゝつまらない！』

と大袈裟に悄氣(せよげ)て見せるので、私は思はず笑ひ出した。

『お鶴さん、あなた一體お幾つです？』

『私？私二十二、もうお婆さんなのよ。』と、私は普通の年累(としかさ)な女のいふやうなことを眞似して云つた。

『へえ！珍らしいですねえ。』

『何が？』

『何がつてまだ罪がありませんよ。そして芳江さんは……？失禮ですが……』

『年なんかどうだつていひぢやありませんが！』

『三つ違ひなのよ。』と私は言つた。

『三つ違ひ――ふゝむ』と頤を引いて感心したように、
『違ふもんですねえ！』
『何がなのよ？』
『まよござんす。ねえお鶴さん、少し情をお知んなさい情を。ね、ものゝ哀れは是れよりぞ知るつてましてね、人間のすべての情の因は、みんな男女の愛情から來るものなんですよ。恐らく世の中にこれっ位美いものはありますまい。』
『まあ人情論者！』
『えゝさうですとも！　貴女が今にお嫁にでも行きあよくわかります。』
『私……私にもお嫁に行くやうな時があるのか知ら！』
『行かなくつてどうします？』
『だつて……』
『お鶴さんはなんだわねえ。十八まで田舎のお祖母さんとこに甘へてられたのがしあはせなのねえ。』と芳江さんが言葉を挿んだ。
『何にしても、もうそろ〳〵お嫁に行くことでも考へなければいけませんよ。もうどうせ戀人とやらいふものが、どうかそのへんにあるのでせうけれど……』
『あら！　嘘ばつかり！　嘘ですよ、嘘ですよ！』
『そら、さう眞劍になるところがおかしい！』

『だけど全くなのよ、この人つたら不思議な人なの。』と芳江さんはまた言葉を入れた。氣のせいか、その目がやはり私を愍(あは)れむやうに見えた。
『けどなんですぜ。お鶴さんのやうな人は、一度なんすりや却つて女らしい女になるんだがなあ！』
『私、今だつて女ぢやありませんか！』
『駄目々々、あなたのやうな情知らずは男の對(あひて)手にはなりやしません！』
『まさかねえ！　そしてお鶴さんはそんなことちつとも困りやしないわねえ！』
『だから駄目だつていふんでさあ。』
　私にはこの人達のいふことが、何かは知らず不平でもあり不安でもあつた。誰が男に嫌はれるのを好む人があらう！　誰が男の對手にならぬとて困る人があらう？
『私は昨日も云(い)ふ通り、細君には失敗しました。夫婦の愛情つてものには失敗しましたが、また女つてものゝ實意(じつい)も隨分見ました。女の誠(まこと)つてなものは、却つて遊女のやうなものにあるもんですぜ。そりあ、あの社會に少し頭を突つ込んで見りあよくわかります。普通遊女なんていふと、薄情者に定(さま)つてるやうに思つてますけれど、あれは一をさして十を云ふもんです。――零落(おちぶ)れにおちぶれて、寒中洗ひ曝(さら)しの浴衣一枚で居るやうな時でも、人目を避ける頬冠(ほうかむ)りをしましてさ、風がピューと吹くと頬が切れるやうに痛いつてな時でも、何となく馴染(なじみ)の女にひかされて、ぶらり〳〵とやつて來る。迷ひ切つてる時には、行かうなんて考へて行けるもんぢやありませんからね、自然と足がその方に向いて行くんでさあ。いつの間にかさうして大門(おほもん)を潜(くぐ)つて居るけれども、懐(ふところ)にはそら鏑(びた)一文(もん)なしと來てる

さうしてだん〳〵と夜が更けて來るてえと、奥山からつき出す鐘がゴーン……あゝもう今夜は會はれずに歸るのかと、恨めしさうに二階の燈りを見上げて涙をホロリ〳〵、實際涙がこぼれますぜ。するとそら？　三階の障子がする〳〵と開いて女の姿が現はれますわ。てすりにうつぶして倒まになつて――平ちやんか――い――するとこつちでも聞えるか聞えない位の聲でオーってますだらう。すると女は自分の簪を拔いて、紙が飛ばないやうにそれにさして、ほつと白いものを投げる。下ではそれを拾つて披いて見るてえと、そら！　中には五圓紙幣が一枚はいつてますわ、あゝこれで會ひに來いと云ふんだなと、女の後姿に手を合して、さて手拭ひを取つて肩に掛けの、ハイ御免よ！　で大威張りさ、金さへありあもう占めたもんでさ。』

あまりの話上手に呆氣に取られて、私はたゞ一生懸命にその身振り手振りに見入つて居た。

『なに是は話しですけどね、併し私も隨分それ位の目にはあひましたよ。凡そ世の中にこの男女の情ほど美しい、そして眞面目なものはありやしません！　ねお鶴さん、ようくお聞きなさいよ、よござんすか、長い〳〵廊下をさ、氷のやうな素足で男のところにしのんで行くその時の姿を考へてごらんなさい。緋縮緬のしごき一つでさ、たゞもう男に會ひたいばつかりで、外のことなんぞは耳にもはいらない、この時の心持ち位眞劍なものはないぢやありませんか！　ね、芳江さん、さうでせう？』

『存じませんよそんなことは！　六番さん、あなたのお名前は？』

『私ですか、私はひらたいらへつぺいと申します。』

『え？』

『ひらたいらへつぺい。』
『どういふ字？』
『平(たひら)の字を四つ書きます。讀んでごらんなさい、ひらたいらへつぺいぢやありませんか！』
『ま、笑戯(ぜうだん)ぢやありませんよ！』
芳江さんは輕るく人を打つ眞似をして、珍らしく陽氣に笑つた。私はいつか炬燵蒲團の唐草模樣を指び撫でたり、綴ぢ糸を引きちぎつたりして默り込んでしまつて居た。

＊　＊　＊　＊　＊

たとへばそれは長い〳〵冬のやうなものではなかつたか――？　生み、形ちつくられ、備へられたまゝに、横(よこた)へられた二十二年間の冬の寢床――そこに私の肌は清淨の薄絹に包まれて靜かに眠つて居た。その夢のうちには智識もあつた。小さな學問もあつた。そのまぼろしには世間があつた。義理も人情も、はたまた幼き戀もあつた。十七八の精神(こゝろ)の目ざめには、苦痛も快樂(けらく)も、乳の如くに又は藥の如くに、爭つて私の口に流れ入つた。その曉から、微かに遙かに聞えて居た歡樂の囃(はや)しが、今や傍(そば)近く私の鼓膜を打つて、思ふまゝな熟睡を遂げた肌は、つひに目ざめねばならなかつた――
柔かな肌、暖かい血、それは今初めて知つたのではないけれど、猶薪(たきゞ)があらば燃えるの力を、私はわが心の支配の外にそれを知つた。
午后の入浴を終へてから、私はふと芳江さんの在所(ありか)が氣になつた。下駄箱を調べてみても、外出した樣子は見えないし、バルコニーには無論居なかつた。もしやと思つてこの頃遊びに行きかけた二階

の女中部屋を覗いて見た。五六足の草履の亂れた中に足を入れて障子を開けると、浴衣の糊を伸して居たお靜が第一番に振りむいて、

『おやいらつしやい。』といふ。

『芳江さん居ない？』

『えゝ、今日はお見えになりませんよ。』

『さう。』

『この頃はちつとも遊びにおいんなはんねんだなつし。』と、隅の方に居たお針師のお筆さんが云ふと『いゝお話し對手が出來ましたものねえ。』と、一番氣取りやのお澄といふのが口を出した。なんとなく皮肉られたやうな氣がしたので、二三人がトン〳〵と叩いては蒲團の綿を入れてるのを掠め見たまゝ、直ぐに障子を閉めてしまつた。

若しや〳〵と部屋の前まで來て、ふと六番の前を見ると、私は急に胸を轟かせて立ちどまつた。そこには見覺えの草履が二足並んで居るのである。直ぐに二三歩前に出たが、不思議な妬ましさがさうすると後めたく、また先を越されたやうな腹たゞしさが、皮肉な微笑ともなつて、私はそのまゝ部屋にはいつて火鉢の前に坐つた。けれども怪しく私は落ちつけなかつた。耳は絶えず、幾重も〳〵の唐紙を徹して、二人の話し聲が洩れでもするかのやうに、鋭くなつて居た。

『お鶴さん、六番さんに行つてみない？』と何故私を誘つてはくれなかつたらう？　もしや彼の旅人の前に、伯母や母達の愛の所置を訴へて、泣いて居るのではないかしら？　ます〳〵あの芳江さんが

あの勝氣な芳江さんが、一日二日の馴染の人に、そんなことを打ち明るやうな不用意な人ではない！では？　たゞなんとなくあの人の話の面白さに、たゞ無駄話をしに、何氣なく出かけて行つたに違ひはないけれど、それにしても何時の間に、そしてまた隠れるやうに……？　搆はない、何氣なく私も行つてみよう！

併し知らず〳〵私は足音を盗んで居た。自分にも譯がわからないほど氣後れがして、七番の前に立ちどまつたまゝ、はいるには這入りたし、またそれが怖いやうな耻しいやうな、思ひ切つて障子に手を掛けようとすれば、おど〳〵とする胸にそれも躊躇はれて、怪まれやすると佇むこともならず、わざと用ありげに急いで廊下を歩き出した。

また梯子段の數でも數へてみようと、足の動くまゝに一足降りかけると、下から勢ひよく驅け上つて來た番頭が、

『星野さん（私の姓）四階に行つて見ませう四階に。』といつてとん〳〵とまた三階の階段をのぼつて行く。

『何があるの？』といひながら、私の心は所を得たやうに、猶豫もなく續いてのぼつて行つた。

『飲坂ア名所は……だ、やアい舟を漕いてやがる。』と、番頭は雨戸を開けながら言つた。その一枚〳〵づゝに明るさがひろがつて行くと、松の間の襖の松の薄闇が、夜が明けるやうに剥がれて行つた。

『誰？　お俊さんなの？』と、私も急いで首を出してみると、女中の一人が小舟を泛べて、巧みに竿

の水を切つて居た。音もなくする〳〵と辷つて行くあとに、さゝ波がさら〳〵とあとを追つて走る。
『星野さん、明日お天氣がよかつたら舟に乘つて見ませうね、みんなと。』と言ひかけて、
『おゝ――い』と欄干に手を掛けて呼ぶと、舟の上から小さな顏が見上げて、私に笑つて見せたかと思ふと、番頭には頤をつき出して『いゝ！』をする。
『畜生！』と番頭は欄干を叩いて笑つた。
『まあ、目が眩むやうだ！』と私は顏を押へて、少しの風にでもゆら〳〵とする縁に思はず跼んだがふと見上げると大屋根の軒に、水晶の鎗のやうな氷柱が、無數に下つて居る。
『あ！』と思はず私は立ちあがつた。
『番頭さん、あれを取つて頂戴あれを！』と私はまるで子供のやうに手を打つて地駄んだを踏んだ。
番頭が欄干に足をかけて、やう〳〵のことで一尺あまりのを打つて呉れると、私はいそ〳〵として梯子段を下りた。
『御免下さい。』と勢ひよく六番の障子を開けると、
『一寸、一寸、いゝものをあげませうか！』と私は立つたまゝ氷柱を目の上高く下げて見せた。
『あ！』といつて彈かれたやうに六番さんが立つて來た。
『こりや珍しい！　何處にあつたんです？』
『四階の屋根に下つてたのよ、今番頭さんに取つて貰つたの。』と、私は一廉の功名でもしたやうに息をはづませて居た。

『まあ大きいのねえ！』と火鉢に手を翳して居た芳江さんが言つた。私はなんとなくその目に面はゆいやうな氣がした。
『ま、お這入んなさい！』
『えゝ』と言つたまゝ、私は誰にともなく、
『よござんすの？』と言ひたいやうな氣がして默つた。
『あさお這入んない〳〵。冷たいでせうさう抓んでちやア、さあ頂きませう。』と氷柱に手をかけると離さうとする間も遲くポキと中程から折れた。
『お鶴さん、私にも頂戴な。』
私はとう〳〵中に這入つた。冷たさのしみ徹つた指の先を、熱した耳たぼにあてると、微かに疼みが感じられた。
『これが湯上りだつたらさぞおいしいでせうね。』と芳江さんのいふまゝに、三人は暫く默つてポリ〳〵と氷を嚙んだ。
『お鶴さん、私は明日發ちます。』と暫くしてから六番さんがいふ。
『どうして？』と私は眞から驚いて聞いた。
『あんまりお鶴さんがつれないから……』
『まあ！』私はどきりとしていつもになく云ふべき言葉にまごついた。眞面目とも笑戯とも判じ兼ねるやうな言ひ方が、この人の癖と知りながら。そして又それが一種の手管と面憎くも思ひながら。

『今度はすつかり悄氣つちまひました。どうもこの部屋は獨り者の居る部屋ぢやござんせんよ・・・』
『どうして？』
『どうしてつて・・・・・そら直ぐ壁一重ぢやありませんか。』とにやりとして、
『あれは妾でせう？』と五番の方を指して低聲になつた。
『あ、さう〳〵、貴女方にあげるものがある。』
とやがて思ひ出したやうに、後向きになつて旅鞄の中を掻い探ぐつて居たが、小さな紙包を取り出すと、啣へて居た煙管を取つてとん〳〵と叩きつけ、私達の顏色を見ながら、
『是非貰つて頂きたいんです。』と云ふ。
何處までも不思議な所に連れて行かれるやうな氣がして、目を凝らして見て居ると、それは二つの珍しい指輪であつた。小さな輪を彩る七寶の、巧みな色の混亂が、纖細な指には派手とも粹とも見えよう、一つは輪が稍々大きく一つは小指にもと思はれる位の小さゝであつた。
『どうなすつたんですの？』と芳江さんも怪訝さうにして居る。
『それをどうぞお二人でお持ち下さい。別に譯があるのでもなんでもありやしません。丁度そんなものを持ち合せてましたから・・・・・私の若い時分に、これ〳〵のところで一人の旅商人が、こんなものを呉れたつけと、思ひ出し話の種にでもして下さい。別に篏めて頂けなくてもようございますから。』
『だつてこんなものを頂く譯がないぢやありませんか！』
『譯なんかもとよりありやしませんよ。そんなものを持つてたつて、私は別にどうしようもないんで

すから。貴方達に貰つて頂きあ、指輪だつてしあわせつてもんでさあ、ねえお鶴さん、貴方も受けて下さるでせう、ね？』

『だつて……』

『私はもぢ〳〵そして無氣味さうに指輪を紙の中に返した。

『ほ！　ぢやなんですね、怪しんでるんですね、私は何も、泥捧をしてこんなものを持つてやしませんよ。決して怪しい品ぢやありませんよ。實はなんです、これは名古屋の藝者が呉れたんです。もう二三年になりまさあ、細君はなし娘はなし、めつたな奴には呉れたくはなし、今まで靴の底に藏つてあつたんでさあ。』

『どうして又こんなものを呉れたんでせう？』

『どうしてつて……いろんなものを呉れる奴がありますよ。女にとつちやあ髪の毛を切つて呉れるのがある、これが一番普通ですね。一人の女はどういふ積りか、簪の玉を取つて脚ばかり呉れたのがありましたよ。

『だけどねえ！』

かう言つたまゝ、困つたやうに私は芳江さんと顔を見合して默つてしまつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

夜が來た――。

川の水音が初めて人の耳に入るを喜ぶかのやうに、迫らぬ響きをたてゝ夜を誘なつて來た。夜が來

た――それすら私には新しい自覺であつた。心あつて見れば灰を覗く埋火(うもれび)も、夜に會(あ)つては殊に赤く輝かしかつた。壁から襖(ふすま)から、すべての小道具に至るまで、なんとは知らぬ潤(うるほ)ひがあつた。裏板にかげらふ洋燈(らんぷ)の灯影(ほかげ)、散らばつた新聞紙に眠る小さな活字――。

『お鶴さん、つまらないからもう寢ませうよ。』

『えゝ。』

言葉少なに答へた私は寢卷に手を通した。その冷たい肌觸りに稍々目ざめて、ふと指輪のことが思ひ出される。

『あの指輪ねえ芳江さん、名古屋の藝者に貰つたなんて眞實(ほんとう)か知ら……なんだか薄氣味の惡るい人ねえ。』

『さうねえ、貰はないつて言つたのがあの人の氣持ちを惡るくしたらしいけれど、でもねえ……。』

芳江さんは何事か考へ込んだ。

私はふと、私の考への及ばぬやうな或秘密が、夜と人の胸との間に、潜(ひそ)み隱れて居るやうな氣がしだした。

あの襖(ふすま)がすうと開く――そして美しい罪の姿が音もなく闇を縫ふて行くのだ。丁度それはあのお七のやうに――。

夜の齎(もた)らす何物かを期待(きだい)するやうに、そして又それを怖れながら、思ひ切つて私は洋燈(らんぷ)の火をフツと消した。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

わが夜着の肩に手を掛けるものもなく、蕾みあまつて開く花瓣のやうに私はふと目を開いた。いつの間に火が埋けられたか、枕近な火鉢のほとぼりが、鐵瓶の湯氣と共にほの暖く顔のあたりをさまよつて居る。急に思ひ出したやうに首を擡げて見ると、夜着の袢にも、枕許に脱ぎ捨ての帶の渦にも、障子襖のたてつけにも、なんの思ひ設けたやうな變りはなかつた。たゞ茶ぶだいの上の茶道具だけが九谷の銘を糸尻に見せて、朝のきまりの梅干が、白い砂糖を頂いて居るだけであつた。それはすでにもう朝も遲いのを證據だてゝ居た。芳江さんはと見ると、この人もいつになく寢入つて、傾向け勝ちに枕に投げ出したやうな顔が、すや〳〵と規則正しい息を吸つて居る。こゝにも何の事件も起つたやうにも見えなかつた。私はほツとして起き上つたが、併しまた心の何處かに不思議な物足らなさを感じて居た。

二三日にない感じの嚴しい朝であつた。こんな日に限つて、から〳〵と乾いたやうな空氣の中に、日の先りも憚るやうに力なく、水氣のない雪が、降るとも降らぬともつかずはら〳〵と飛んで居るのである。樋を傳つて湯壺に流れ落ちる湧き湯も、心持ち温度を増して居ることが肌に知られた。

湯覺めのせぬやうにと、早くから置炬燵の蒲團にくるまつて居ると、二三度往き來をして居る廊下の草履が、

『えゝ、輕便は九時二十三分でございますよ。』

とお靜さんの聲としてそれは六番の前らしい。私はふと聞き耳を立てた。さうあるべき筈ではあるの

だけれど、今更に胸が騷ぐほど殘り惜しい！　明日からはまたもとのつまらぬ退屈な日々に變つてすまふのだ。なんとなく淋しい心持ちになつて、私は炬燵にうつぶして目をつぶつて居た。

する〳〵〳〵と來た草履がひたと止まつてさらりと障子が開く。

『や、どうもお世話になりました。よろしく。』

ひたと又障子が閉まる。

『あらお歸りでございますか、もう？』と言つた芳江さんの言葉も待たなかつた。

『六番さんお發ちですよう！』と階下の帳場に知らせるお靜さんの大きな聲が響いた。

私は彈かれたやうに起つて部屋を出た。芳江さんも默つて後から續いた。急いで階段をのぼつて入口に出ると、番頭の直した下駄に足を入れながら振りかへつて、

『や、これは恐れ入ります。どうぞお構ひなく。』と昨日までの親しげな調子が何處か改まつて居た。

『生憎降つてまゐりましたな。』と番頭がいふ。

『なアに、長岡まで輕便で行きあ、あとは汽車だから大丈夫でさ。』と云つて私達に、

『これから山形の方にまゐります。來月の初め頃に一寸歸らうと思ひますから、また御緣があつたらお目にかゝりませう。や、左樣なら！』

『左樣なら！』

『どうもお麁末申上げました。』

『御機嫌よう！』

厚つぽい舊式な外套の肩に、鞄と鐵色木綿の風呂敷包みを、手拭ひで振り分けにしてよいと掛けると、中折れの帽子の庇に一寸手をかけて、急ぐものゝやうに歩きながら洋傘をひらいて五六歩出た。見る〳〵間に大かさの雲が、黒い傘の頂きに模様を打つて、外套の背といはず裾といはず、あと追ひかけて狂ふやうにまつはりついた。

『今日の雪は積りさうだぞ。』と、獨り言のやうに番頭は云つてガラ〳〵と硝子戸を閉めた。

あゝ何と云ふ本意なさ――私は驅けるやうに部屋に歸つて炬燵にはいつた。そして二人は暫らくの間默り合つて居た。

【入力者注】底本は総ルビですが、入力者の判断で一部にとどめました。
明らかな誤植と考えられる文字も、底本通りにしてあります。
文末の句点が省略されている場合には補いました。

底本：「新小説」大正二(1913)年三月
テキスト入力：小林　徹
公開：令和三(2021)年十一月二十七日

リンク：水野仙子「作品年譜」
水野仙子ホームページ